公表　事業所における自己評価考察票

○事業所名	療育センターさくら草　すみれ			
○保護者評価実施期間	7年　10月　8日	～	7年　10月　28日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	21	（回答者数）	14
○従業者評価実施期間	7年　10月　14日	～	7年　10月　17日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	14	（回答者数）	14
○事業者向け自己評価表作成日	7年　12月　18日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	活動プログラムについて、固定化しないよう、また、一人一人に合わせて支援できるよう、職員間で丁寧に話し合いながら実施することができている。	あえて定期的に同じプログラムを入れることでお子さんが新しい遊び方を生み出すこともあり、積み重ねを大切に、意図をもって設定している。 職員間で話し合いながら、お子さんの成長に合わせて遊びの内容を検討している。	他施設との勉強会や交流研修で、他施設の職員と情報交換を行うなど、新しい遊びのヒントを得て、活動をより充実させていく。
2	児童発達支援計画書について、様々な職員が関わりながら作成することができている。	担任、児童発達支援管理責任者だけでなく、専門職の先生方にもケースカンファレンスに参加していただき、計画の検討を行っている。 通園の集団での取組みだけでなく、個別訓練で取り組んでいることも考慮した内容になっている。	支援計画作成時のケースカンファレンスでは、引き続き専門職の先生方と一緒に内容の検討を行い計画に盛り込んでいく。また、日頃の通園の様子を伝え、共有を図り、次の支援計画に生かせるよう取り組んでいく。
3	非常時の対応について、事故防止・虐待防止の取組を行うことができている。	入園前の健診にて、発作や服薬、アレルギー等の状況を確認し、職員間で情報を共有し、事故防止に努めている。虐待防止については、定期的に支援の振り返りを行ったり、身体拘束については支援計画の際に保護者に説明を行っている。	ヒヤリハットを生かしながら定期的に支援を振り返り、今後の支援に向けた話し合いを持つ。また、話し合う際には必ず一人１回は発言できるよう機会を設けるなどしていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	きょうだい同士で交流する機会が積極的に設けられていない。	きょうだいの来園について、コロナ禍後に少しずつ再開しているが、コロナ以前のようにきょうだいで交流するという内容まではまだ実施できていない。また、今年度はきょうだいの年齢に幅があること、きょうだいの人数が少ないことも要因のひとつと考える。	現在、きょうだいが通園に同行できる機会を設けたり（長期休みの夏休み・冬休みなど）行事できょうだいも参加しやすい内容を企画するなどの取組を行っている。保護者のニーズだけでなく、きょうだい自身の状況（年齢など）も念頭に置きながら計画していく必要があると考える。現状としてはきょうだいの人数が少ない状況のため、引き続き、園に来ていただき園について知っていただく機会作りというところから取り組んでいく。
2	地域との繋がりを積極的に設けられていない。	療育の入り口という施設の特性上、外部の方をお招きするといった方法が難しい。交流保育については、コロナ禍後、少しずつ再開しているが、実施の時期が感染症の流行時期と重なるため、回数を重ねることが難しい。	昨年度から、地域の公民館の文化祭にアート作品を出展させていただいており、地域の方々に施設について知っていただく機会を作っている。引き続きこうした機会を作るとともに、１月からは近隣の保育園との交流保育を計画しており、お子さん同士で直接関わりを持つ形で地域との繋がりを作っていく。お子さんが園生活に慣れ、行事などとの兼ね合いを考慮すると、時期が感染症の流行時期と重なってしまうが、感染症の対策を行った上で無理なく取組んでいく。
3	関係機関との連携が積極的に行えていない。	フォロークラスのお子さんが通っている保育園への訪問を行っているが、今年度は依頼がなく、実績がない状況。学校との情報共有は就学時に引継ぎを行っている。	フォロークラスの利用開始の際や定期面談の際に、連携について保護者に説明し、周知していく。 就学時の情報共有については、引き続き学校の先生が来園した際や電話にて行い、保護者の承諾を得た上で、必要に応じて書面などでも引継ぎを行っていく。